

モデルプログラム J-1 在籍学級での学習支援—外国語による学習体験—

ねらい	外国語での学習体験を通して、外国人児童生徒等は日常会話ができているとしても教科内容の理解や活動参加に困難を抱えていることを理解し、在籍学級での教科指導において外国人児童生徒等へどのような支援が有効か考えられるようになる。
対象	<input checked="" type="checkbox"/> 教師を目指す学生(教員養成課程他) <input checked="" type="checkbox"/> 日本語教育を学ぶ学生 <input checked="" type="checkbox"/> 現職日本語指導担当教員 <input checked="" type="checkbox"/> 現職一般教員 <input checked="" type="checkbox"/> 管理職 <input checked="" type="checkbox"/> 指導主事 <input checked="" type="checkbox"/> 日本語支援員/母語支援員
日本語指導・外国人児童生徒等教育の経験	<input checked="" type="checkbox"/> 経験なし <input checked="" type="checkbox"/> 1年目 <input checked="" type="checkbox"/> 2-4年 <input type="checkbox"/> 5年-9年 <input type="checkbox"/> 10年以上
高めたい資質・能力	<input checked="" type="checkbox"/> 捉える力(子どもの実態把握) <input type="checkbox"/> 捉える力(社会的背景の理解) <input checked="" type="checkbox"/> 育む力(日本語・教科の力の育成) <input checked="" type="checkbox"/> 育む力(異文化間能力の涵養) <input type="checkbox"/> つなぐ力(学校作り) <input type="checkbox"/> つなぐ力(地域作り) <input type="checkbox"/> 変える/変わる力(多文化共生社会の実現) <input checked="" type="checkbox"/> 変える/変わる力(教師としての成長)
主な内容	J 在籍学級での学習支援 D 文化適応
活動形態	<input type="checkbox"/> 講義型 <input checked="" type="checkbox"/> 活動型 <input type="checkbox"/> フィールド型 <input type="checkbox"/> 実習
時間	60分
流れ(・項目)	活動(◇活動の工夫)
1. 外国語での学習体験から子どもたちの思いを理解する。(20分) ・学習参加のための支援(J) ・言語能力の捉え方(F) ・子どもの文化適応(D)	1. 外国語での学習体験を通して外国語で学習する難しさを知る。 1) 英語で算数の授業を受ける。 ◇体験中は、「自身が外国人児童生徒だったら」ということは考えず、学習に集中するように促す。 2) 1)の体験で、何が難しかったか、どのような気持ちだったかをグループで話し合い、外国人児童生徒の思いと、支援の方法を考える。 ◇「難しかった」という感想にとどまらず、参加者が具体的に自分の体験や思いを語れるようにする。 例) ・周囲が答えを書いているのを見て恥ずかしかった。 ・初めから無理だと感じてあきらめた。 ・なんとなくわかる単語もあったので、集中して聞いていたらとても疲れた。 ・隣の教室から雑音が聞こえてきて聞き取れなかった。
2. 支援の方法を考える。(15分) ・学習環境づくり(J)	2. 1で示された「学習者の困難・気持ち」への対応方法をグループで検討する。 例) ・あきらめる気持ちが生じやすい。 ・母語で聞き取るときより集中力が必要である。 ⇒子どもの頑張りを認めるなど、学習意欲を維持するための働きかけが重要 ・口頭での説明だけではわからない。 ・一方的に情報を提供されると、途中から全く理解できなくなる。 ・外国人児童生徒一人で頑張るのには限界がある。 ⇒視覚的資料の活用、情報を分割して提供、周囲の児童生徒による支援などが必要
3. まとめる。(10分)	3. 外国人児童生徒は今回の体験よりはるかに長い時間を「外国語」の中で過ごしていることを確認し、教員・支援員による支援の必要性を理解する。
備考	・支援方法として何を検討するかによって、外国語学習体験の授業の内容を決定する。このモデルプログラムは外国人児童生徒の「教科学習の困難さ(多少会話ができても、教科内容の理解や活動参加は難しい)」への気づきと支援方法の検討をねらいとしたため、受講者の能力に違いがある英語で授業を行う計画にしてある。

	<ul style="list-style-type: none"><li>・編入当初の子どもの困難を体験的に理解することをねらいとするのであれば、全受講者が全く知らない言語が望ましい。また、目的によって、教科内容としては、算数でなく社会科等でもよい。</li></ul>
--	--